

子どもの泉

子どもの泉 第37号
2015年10月1日発行

京都造形芸術大学
芸術文化情報センター
ピッコリー



〒606-8271
京都市左京区北白川瓜生山2-116
TEL: 075-791-8013
FAX: 075-791-3318
<http://www.piccoli.jp/>



鑑賞による子どもとの対話

数年前の話になりますが、家族とある海辺の複合施設に立ち寄った時のことです。施設内のショッピングモールで魚介類を食べたり、買い物をしたりして楽しく過ごしていました。そのうち、その施設内に観覧車があることに気づき、早速、乗ってみる事に。ただ、私の妻は狭かったり高かったりするのが苦手なので、当時、小学校2年生の娘と2人きりでちょっとしたデートになりました。

「いつまで、一緒に観覧車に乗ってくれるんやろう」とか思いながら…。

おっと、そんな話ではなかったですね。

日が暮れかかり、眼下に広がる街並みが夜景へと変わっていきました。

「夜景、綺麗やね。父ちゃん、写真撮ろっと」と、デジカメで1枚。

「私も撮らせて〜！」と娘も1枚。

同じ場所で、同じものを見ていても、当然、私と娘で全く違う作品ができあがりました。その時、「ああ、これがこの子が見ている世界かあ」と思いました。そしてそれは、改めてカタチにすることの素晴らしさを感じた瞬間でもありました。

どんなに分かろうと思っても、娘が見ている世界を、私は見る事ができません。でも、この子が、自分の思いを何らかのカタチにしてくれれば、それを理解することはできるのです。「カタチにする」というのは、勿論、写真に限ったことではありません。絵も造形もデザインも、または文章や言葉も、自分の思いを表現するものです。「写真、上手やん」と、娘をおだてながら、そんなことを感じた瞬間でした。

この春、娘も中学生になり、一緒に美術館や博物館へ行く機会も増えました。2人で同じ作品を目の前にしながら、ふと、観覧車で写真を撮った時のことを思い出し、「この子は、どんな世界を見るんやろ？」と、私は素朴な疑問を感じます。そして、「どう見えてる？」という質問をしてしまうのです。「何が描かれてる？」という、一見、当たり前の質問をすることも度々です。娘もまだ素直なので、「見たら分かるやん！」とは言わず、彼女なりに一生懸命、自分の見た世界を教えてくださいました。そのうち、幾つかの情報に基づいて、娘の中で作品の解釈が生まれます。時には、思いも寄らない物語が語られ、時には、作者の名前さえ知らない筈なのに、作品の背景に迫ることもあるのです。こうなると私の方は、「何が描かれてる？」「どう思う？」「なんで？」の繰り返し。もう、作品をみているのか、娘の話をお聴きしているのか、そのあたりも怪しいところです。しかし、これが楽しい。それは、対話をおとして、娘の価値観に触れている感覚があるからです。

どんなに分かろうと思っても、娘が見ている世界を、私は見る事ができません。でも、理解したいのです。そして、最近はこのことを心配しています。

「いつまで、一緒に美術館に行ってくれるんやろう…」と。

石山潤 (いしやまじゅん)

京都造形芸術大学
アートリンクセンター
講師 主任研究員

京都造形芸術大学美術科洋画コース卒。
中学校美術教諭の後、雑誌、企業広告、
イベント、Webなど、各種広告ディレク
ターを経て本学勤務。ポートフォリオ制
作及びプレゼンテーション授業を担当。
2005年より美術教育研究に従事。日本
国内の小中高校の他、韓国や台湾を訪
問し、接続教育の実践を行ってきた。
現在は、「コミュニケーション」をテーマ
に「対話型授業」を実践研究。教員研修
等、講演多数。

特集

「そつぎょうてんにいこう！」

ピッコリーの母体である京都造形芸術大学は、現在13学科21コースを有する芸術大学です。多くの学生が、4年間の学びの成果である「卒業制作」を『卒業展』で発表します。

「美術館大学構想」に基づき、2010年度からは大学全体を展示会場に見たてて運営しています。学内で行なうということは、ピッコリーの利用者みなさんにも気軽に足を運んでいただけるということです。ピッコリーのアート鑑賞ツアー「そつぎょうてんにいこう！」の企画はそのような背景からはじまりました。

近年、美術館では子ども向け企画展がしばしば催され、子どもたちが楽しく作品にアプローチできる工夫が数多く提供されています。一般の美術展では著名な作家を扱い、展示作品の詳細や社会的価値をふまえているのでそういったサービスが可能なのですが、卒業展では、ほぼ無名の学生たちが開催直前まで制作にあたるため、第三者が作品解説をすることはまず不可能です。そこで「そつぎょうてんにいこう！」では、子どもたちがアート作品に「直接」出会うことを大切にしたいと考えました。

解説をしないとはいえ、ツアーで紹介できる作品数には限りがあるため、スタッフは事前に子どもたちが楽しめるかを調査します。会期が始まると同時に、700名をこえる出展者の作品を見てまわる



のですが、すべて見てまわれば丸二日ほどかかります。長編映画や小説など見きれない作品もあり、毎年大変ですが、楽しい作業でもあります。

一方で、学生たちがどのように卒業展に臨むかを、「こども芸術学科」の例をあげてご説明しましょう。4回生は通年で「卒業研究」という授業を履修し、数度の「合評」で中間発表をしながら制作をすすめます。作品を完成させるだけでなく、学内のどの場所でどのように展示するかを決めることも重要になってきます。1月には「展示計画」や「ポートフォリオ」を提出し、教員による最終審査に通過せねばなりません。そこから、卒展パンフレットの校正や図録に掲載する作品写真の撮影などが急ピッチで進められ、会場設営や会期中の受付などは、他学年の学生も手伝えることとなります。

ツアーコースを組むのには毎回苦慮します。同じ学科でも、年度によって、印象はがらりと変わり、実際に足を運ぶまでは会場の雰囲気は予測できませんが、作品をバランスよく選ぶことだけは心がけてきました。例えば、美術工芸系学科・デザイン系学科のそれぞれからとりあげることに。わかりやすい具象作品だけでなく抽象作品も選ぶこと。立体作品は目立ちやすいけれど平面作品も丁寧に見ること。体験型の作品をとり入れ、視覚だけでなく五感を意識することなど。そして最終的に時間を計りながらの下見を経てコースを決定します。



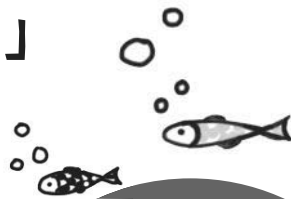
😊 アンケート「アートな思い出」

美術館にいて、絵やオブジェをみたことはありますか？公園や駅前、ひょっとしたら学校にも、アート作品があるんじゃないかな？アートにまつわるみんなの思い出、おしえてね。

ピッコリーのおきにいりの絵本の絵をみに、美術館にいきました。(佐々木マキのえ) (5才女児)



中学生のとき、ひとりで美術館に行くのが楽しみでした。モネのルーアン大聖堂の絵を見たときは、サイズが大きく、遠くから見るとわかるけど、近くで見ると何かなんだかさっぱりわからないのがすごいなー、と思いました。(ピッコリースタッフ：めぐみ)



造形大の卒業展を、ピッコリーツアーに参加して、娘とみました。瓜生山の土を使った陶芸作品がありました。娘も、マジマジと作品を見ていました。自宅に戻ると、娘が粘土で陶芸作品を作っていました。おもしろかったです。(6才女児とお母さん)



わたしのさかながいっぱい絵が小学校のろうかにかざられていたよ。(7才女児)



ふしぎなとけい(※アサヒビール大山崎山荘美術館に展示されている、古い時計)をみたよ。びじゅつかんでみたよ。(5才女児)



ツアー当日、集まってくれた子どもたちには、展覧会を見るとき「かっこいいポーズ」を伝授します。それは、1) 両足をすこし開いた楽な姿勢で立ち、2) うしろで手を組み、3) 軽く首をかき上げてゆったり作品を眺める、大人っぽいポーズ。子どもたちがマナーを守り、落ち着いて鑑賞できるようにするための、雰囲気作りの工夫です。

ツアーを盛り上げるためには、同行する学生の存在も重要です。一緒に作品を見て、作品名や材料といったキャプションの文字情報を伝えたり、子どもたちの発言に相槌をうったりするのが、彼・彼女らの役割。「子どもの感想を否定しない」こと、それに「作品の解釈を決めつけるような発言は避ける」ことのふたつだけをお願いし、あとは自由にコミュニケーションをとってもらいます。そういったおしゃべりが、子どもたちの鑑賞の一助となるからです。

ツアーコースは事前に学内に周知するので、作者本人が会場で待機してくれるケースも多く、作品によっては作者へのQ&Aタイムを設けることができます。アートそのものを楽しむことはもちろんですが、アートを介したコミュニケーションを子どもと学生の双方に提供できることも「そつぎょうてんをみにいこう!」の喜びのひとつです。終了後は「分か



ち合い」と称し、参加したみなさんから印象に残った作品をひとつずつあげてもらいます。感想をシェアすることで、ひとりで見るよりもはるかに豊かな体験が得られます。

そのような準備をして臨む「そつぎょうてんをみにいこう!」ですが、ふたを開けてみると、予想をこえる子どもたちの反応に、スタッフは毎回大きな感動をもらうことになります。作品に触れないように、ぎりぎりまで顔を近づけて見る子。床面いっぱいに描かれた絵に、おおいかぶさるように寝ころがる子。家族にも見せたいからと、撮影可の作品をたくさん写真におさめる子。ずっと触りたいのをがまんしていて、積み木の作品で堰をきったように遊びはじめる子…。アートに対峙する子どもたちのいきいきした表情や、作品を受け入れてくれる姿を、わたしたちは一生忘れないでしょう。

ツアーの冒頭で、アートとは何かを子どもたちに説明しなければならないとき、スタッフは「ひとの心をうごかす何かをつくりだすこと」という言葉を使います。そんな定義にはおさまらないのが本当のところでしょうが、学生たちの創作活動によって、ピッコリーの利用者のみなさんの心が動くことがあるならば、これ以上のうれしいことはありません。

卒業展、ぜひご来場ください。見る人それぞれの心が、何かに満たされる体験が得られると思います。



京都造形芸大の卒業展を3年連続で見に行きました。写真の様なえんぴつ画、いろんな形をしたつみきの作品、手でふれる事もできる作品が多いので作品の中に入っていきたくても楽しかったです。作品を見る時のかっこいい見方、「うしろに手をくんで」見るのは子どものポーズのひとつになっています。
(6才女兒とお母さん)

学校で作品をかいて、さいご、えい語で名前をかいてアートのことについてはほめられたけど名前を一字まちがえたのでかわれました。
(8才男児)

京都造形芸術大学のそつぎょう展に行った時、てんじ室ごとにへやのにおいが違ったのをおぼえています。
(9才男児)



ピッコリーの近くにある水色の大きなかさのオブジェ(※大階段を上ったところにある佐藤卓さんの作品)がとても印象的です。子どもも大好きです。
(6才女兒と3才男児のお母さん)

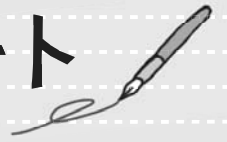
おふろやさんで水ぶろの水が出ているライオンが、ターコイズブルーで口をあけていてすごかった。
(9才女兒)

神社にいる狛犬がすぎて、じっと眺めてしまいます。顔の表情や手の形など、同じものがないところが面白いです。
(ピッコリースタッフ：よっしー)

子ども(4才、7才)の描く絵に日々癒されています。ちょっとした美術館に来ている気分になります。
(7才女兒とお父さん)



「そつぎょうてん」ツアーレポート



いのちの在り処（ありか）

サイズ可変

インスタレーション作品、寒天、瞬間接着剤

井上亜美（2013年度卒）

こども芸術学科 こども芸術コース

展示室に入ると、小さく透きとおった破片が、部屋じゅうに散らばって、自然光の中できらきらと光っています。目をこらすと、それらが、セミやトンボなどの姿をしていることがわかります。虫の死骸をかたどった作品。もろく儚いその美しさに、大人も子どもも静かに作品を見つめました。

◆ わたしとそつぎょうてん 井上亜美

セミの抜け殻を見たとき、まだ何かが宿っているような気がしました。普段、虫に触ることのなかった私が、その抜け殻をそとポケットに入れて持ち帰りました。今から2年ほど前のことです。その体験から、道端に落ちている虫の死骸を拾い、型をとり、たくさんの抜け殻をつくりました。

今思えば、人と関わることにどこか積極的になれずにいた私の、自分なりに見つけたいのちと向き合う方法だったのだと思います。虫たちと声のない会話をしながら、周囲の世界との関わり方を探っていた気がします。最近わたしは、狩猟の勉強をはじめました。猟師さんや動物から教わることは、すべて自分の生活につながっていきます。これもまた、いのちと向き合うということなのかもしれません。



へんなのとわたし

H20cm×W14cm

素材：彩現 photo SJs-A4-1041 シマメ 白 厚口
(インクジェットプリンタ専用紙)

モコ (ファンシーペーパー)・刺繍糸・両面テープ

使用ソフト：Adobe photoshop CS5・Adobe illustrator CS5

岡本圭南子（2012年度卒）

こども芸術学科 こども芸術コース

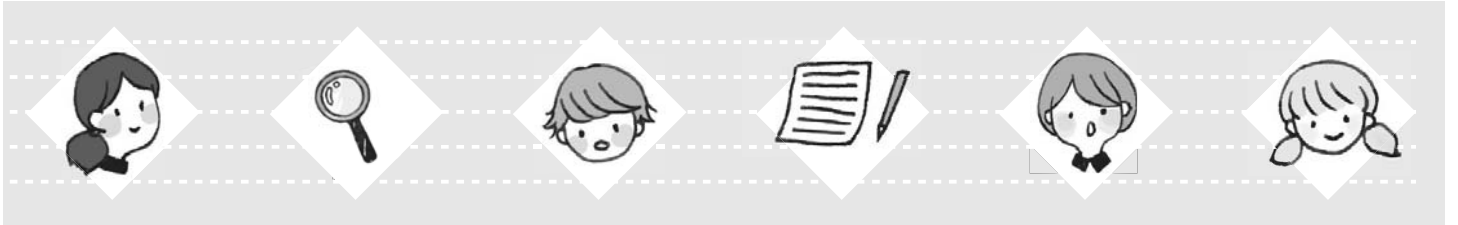
ごく幼い頃の記憶から着想したという絵本作品です。絵本を制作する学生は多くいますが、圭南子さんはピッコリーのボランティアでもあり、制作中から作品を見せて来てくれていました。実際によみ語ってもらったところ、あるお母さんが「子どもの頃の事をこんなふうに覚えていて、それがこのように作品になるのだとわかり、聞いてよかった」と言ってくださいました。

◆ へんなのとわたしのはなし 岡本圭南子

私がまだ、小さな子どもだったころ。近所の川でとてとても、不思議な生き物を見ました。見たのはほんの一瞬で、誰も信じてくれなかったけど、あの日に見た桃色のへびは、今も記憶の中で泳いでいます。あの日から随分時間がたちました。大人になってから、見えなくなっ

まったものがたくさんできました。けれど、子どもの頃から持っていた、不思議なものたちに対するキラキラした気持ちは、ずっと変わらない私の宝物です。

そんな訳で、どこかでまた彼らに出会えたらなあと、家で、または出掛け先で、あるいは子どもたちの言葉の中に、今日もその姿を探しているのです。



無数の「わ」
 300×300×300cm
 オーガンジー、チュール、
 ナイロンシャー/ゆび編み
 中根千枝 (2010 年度卒)
 美術工芸学科
 染織テキスタイルコース

白くすきとおるような編みひもが、うずまき状になったり天井からさがったりして展示室の一角をつんでいます。すべてゆび編みでつくったのだそうです。やわらかそうに見えますが、「さわってみたいひと〜」との呼びかけに手を伸ばした子どもたちは「うわー」「ごわごわする!」。作者の千枝さんが、けっこう硬いでしょと笑いながら制作話をしてくれました。



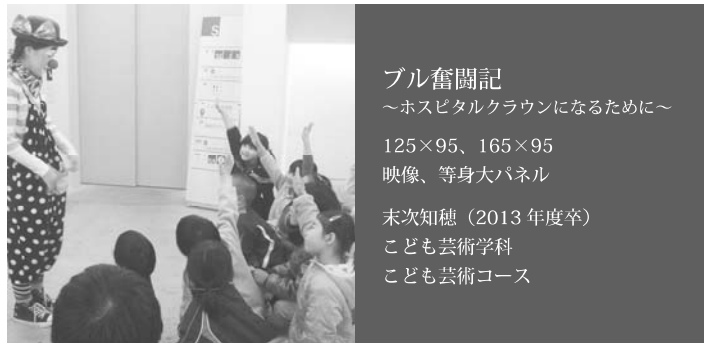
瓜生焼
 サイズ可変
 瓜生山の土/轆轤成形、手びねり
 中村江里 (2014 年度卒)
 美術工芸学科
 総合造形コース

本学の裏の「瓜生山」の土を自ら掘り、生成し焼いたという陶器を、学内の茶室「千秋堂」をまるごと使って展示。入口の芳名帳に添えられた花器、床の間の壺、茶器、いたずらのように庭に飾られた器、すべて江里さんの作品です。陶芸用の土ではないので、成形中にくずれやすくて大変だったそうです。丁寧なおもてなしも含め、場のすべてが完成されたひとつの作品となっていました。



繋がりがたち
 H1800×W600mm 他数点
 墨、紙
 小山友香 (2011 年度卒)
 こども芸術学科
 こども芸術コース

「これ、なんのかたちに見える?」とたずねると、見ていた子どもたちからは「雲」「水たまり…?」「ブラジャー!」などの意見が。作者の友香さんは、「はじめに自分がイメージしたのは「空」だったんだけど、この絵を見るひとが、なるべく別のものを想像してくれるといいなあ」といながら、描きました」と教えてくれました。みんな大正解でしたね。



ブル奮闘記
 ~ホスピタルクラウンになるために~
 125×95、165×95
 映像、等身大パネル
 末次知穂 (2013 年度卒)
 こども芸術学科
 こども芸術コース

作品が有形であるとは限りません。病院などで心のケアをする道化師・ホスピタルクラウンとして修行中の「ブル」さんは、その活動を映像やパネルで展示。ツアーで子どもたちが集まると「よかったら何かやりましょうか?」と声をかけてくれ、その場でショータイムに!手からボールがあふれたり、パルーンで犬ができたりして、みんな大喜びでした。



オオパクトキャシャ
 約 4000×1800cm
 模造紙、クレパス
 山田登美子 (2010 年度卒)
 こども芸術学科
 こども芸術コース

本学体育館の床いっぱい広がる、巨大な絵! 作品の上を歩き回ることができます。登美子さんが「人間の中に住む怪物」をクレパスで描いた作品で、テーマからの連想とは裏腹に、虹のような明るい色があふれます。ツアーでは、舞台の上から全体をながめたり、絵のどこかに隠れているという怪物「オオパク」と「キャシャ」を探したりしました。



つながる県 project
 14000×8000×4000mm
 4分30秒
 インスタレーション 映像
 安地まどか (2012 年度卒)
 情報デザイン学科
 コミュニケーションデザインコース

巨大な日本地図の、各都道府県が、カラフルな帽子になっています。ツアーでは参加者みんなが好きな県を選んでかぶり、楽しく記念写真をとってしまいましたが、ほんとうは、これを用いたワークショップ活動が作品の主演。参加者それぞれの故郷や親戚のいる県など、地域の話で話はずみでした。

2014 年度活動報告

運営概況

◆ 開館実績 ◆

	2013 年度	2014 年度
開館日	木～土曜日 10:30～18:00 日曜日 10:30～17:00	木～土曜日 10:30～18:00 日曜日 10:30～17:00
開館日数	204 日	198 日
入館日数	13,967 人 (一日平均/68.5 人)	11,841 人 (一日平均/59.8 人)
貸出冊数	15,489 冊 (一日平均/75.9 冊)	16,068 冊 (一日平均/81.2 冊)

◆ 所蔵資料状況 ◆

資料数 17,965 冊	
児童図書	15,765 冊
成人図書	834 冊
外国絵本	963 冊
雑誌	255 冊 (6 誌)
メディア資料	148 点

◆ 活動報告 ◆ ※ 参加人数は全て実数

1. おはなし会

毎週日曜 15 時半～16 時に、ピッコリーのボランティアグループ「ピッコリーネットワーク (以下、ピコネット)」のメンバーとピッコリースタッフで絵本の読みかたりや手あそび、紙芝居などを開催。なお、8 月 3 日は夏休みスペシャル、9 月 21 日は瓜生山祭スペシャルとして行った。

● 実施回数：33 回 ● 参加人数：438 人



2. ブックトークの時間

ピコネットのメンバー主催で、毎月 1 回土曜 15 時半～16 時、テーマに沿って、絵本や読み物、科学の本を紹介。

● 実施回数：11 回 ● 参加人数：135 人



3. おはなしクラブ横丁

京都おはなしを語る会の主催。毎月 1 回、日曜 16 時～16 時半、ストーリーテリングを中心に親子でおはなしを聞く機会を提供。

● 実施回数：10 回 ● 参加人数：157 人



4. ピッコリー映画上映会

芸術文化情報センター映像ホールを使用して、子ども向けの映画上映会 (上映権付) を不定期に開催。各回 10 時 45 分より。参加費無料。

● 実施回数：10 回 ● 参加人数：179 人

<開催内容>

- 4 月 27 日 (日) NHK こどもにんぎょう劇場より「おやゆびひめ」ほか
- 5 月 1 日 (木) NHK こどもにんぎょう劇場より「西遊記」ほか
- 6 月 29 日 (日) 大藤伸郎賞受賞短編アニメーション全集より「みにくいあひるの子」ほか
- 7 月 31 日 (木) 大藤伸郎賞受賞短編アニメーション全集より「銀河の魚」
- 8 月 21 日 (木) 日本アートアニメーション映画選集より「ポロギター」ほか
- 10 月 12 日 (日) 世界名作アニメーションより「男装の騎士ムーラン」
- 11 月 1 日 (土) NHK こどもにんぎょう劇場より「赤ずきん」ほか
- 12 月 25 日 (木) 「雪の女王」
- 2 月 8 日 (日) NHK こどもにんぎょう劇場より「かちかちやま」ほか
- 3 月 26 日 (木) 「タンタンの冒険旅行 ビーカー教授事件」

5. 工作会

① 週末の工作会

子どもを対象に、ピコネット及びピッコリースタッフが講師となって土曜13時半～16時に開催。身近な材料を使ったアイデア工作を中心に企画し、毎回大勢の参加がある人気の催し。なお、9月20日は瓜山祭スペシャルとして行った。

●実施回数：35回 ●参加人数：909人

<開催内容>

- 4月 「ひらひら、ちょうちょう」「風ぐるま」
他全3回 参加人数70人
- 5月 「登る！お母さん」「キラキラ風の音」
他全4回 参加人数94人
- 6月 「もしもし電話」「かえる池ジャンプ大会」
他全3回 参加人数98人
- 7月 「七夕かざり」「ふうとうバスの旅」
他全3回 参加人数95人
- 8月 「ゆらゆらクラゲ」「タコくんお届け大作戦！」
全2回 参加人数68人
- 9月 「王様のかんむり」「ステキなスキ」
他全3回 参加人数80人
- 10月 「パン食いモビール」「秋のおでかけバック」
他全3回 参加人数74人
- 11月 「タンタン♪タンバリン」「飛べ！にじいろパラシュート」
他全3回 参加人数75人
- 12月 「サンタクロースの空とぶそり」「雪やこんこん・クラッカー」
全2回 参加人数42人
- 1月 「ぼんぼんひつじ」「占いコマまわし」
他全3回 参加人数107人
- 2月 「ふしぎ絵」「しあわせの青い鳥たち」
全2回 参加人数46人
- 3月 「ゆらゆら春の虫」「ウグイス鳴いた」
他全3回 参加人数60人



② 工作会ワークショップ

子ども達がじっくりと集中して創作をすることを目的とした「工作会ワークショップ」。ピコネットとピッコリースタッフが企画を立てて取り組んだ。

●実施回数：1回 ●参加人数：23人

●開催場所：S-41 教室

<開催内容>

- 8月9日(土)10:00～12:00 こね色ぐるぐる
一つくろう☆自分だけのチョークー



6. トットクラブ

乳幼児と保護者対象の活動。「子育てに何かいいもの」をテーマに、木製のおもちゃで自由に遊んだり、手あそびやわらべうた、読み語りをを行い、基本的に隔週金曜(月2回)ピッコリー館内で開催。また、0・1歳児とその保護者を対象とした「トットクラブ01」をこども芸術大学が開催した。

「トットクラブ」

●実施回数：24回 ●参加人数：340人

「トットクラブ01(ゼロワン)」

●実施回数：2回 ●参加人数：67人



7. おたのしみ会

① 春のわくわくおたのしみ会

“ばびぶペパペット”を招いて人形劇を観劇。

●実施日：6月1日(日)11:00～12:00

●会場：NA102 教室 ●参加人数：89人

<プログラム>

1. 人形劇「どんぐりころころどうなるの？」
2. 紙芝居「どうぶつしりとりはじまるよ」
3. 人形劇「おなべとことこ」



② クリスマス会

ピッコリー・こども芸術大学・こども芸術学科の共催で実施した。ピッコリースタッフによる影絵、こども芸術学科学生による劇、<うたぶ>による歌の演奏、こども芸術大学スタッフとお母さん有志による工作会ワークショップを行った。

●実施日：12月13日(土)10:30～12:00

●会場：こども芸術大学 ●参加人数：114人

<プログラム>

1. 影絵「クリスマス・ベル」ピッコリースタッフ
2. 劇「クリスマスおたのしみステージ」こども芸術学科学生有志
3. 歌「うたぶがこども芸大にやってきた！」<うたぶ>のみなさん
4. 工作会ワークショップ「ダンボールであそぼう」
こども芸術大学スタッフとお母さん有志

8. ボランティア講座

ボランティア登録説明会を開催し、趣旨に賛同し登録を希望する方に、児童図書館活動と造形活動についての講座を開催。造形活動についての講座は実際の工作会と連動した。

① ボランティア講座「子どもと本をつなぐ活動」

- 実施日：5月18日（日）14：00～16：00
- 講師：ピッコリースタッフ
- 会場：映像ホール ● 参加人数：10人

② ボランティア講座「子どもと楽しむ造形活動」

- 実施日：5月31日（土）13：00～16：00
- 講師：ピコネット 渡辺 千枝子さん
- 会場：映像ホール ● 参加人数：8人

9. その他の催し

瓜生山地蔵盆

- 実施日：8月23日（土）10：30～15：00
- 会場：こども芸術大学 ● 参加人数：267人

<プログラム>

1. お地藏さんへお参り（こども芸術大学にて）
2. こども芸術学科学生による「ペープサート」
3. パフォーマー Rivom による「パントマイム」
4. 「アート屋台」こども芸術学科、こども芸術大学、ピコネット
5. 社会人吹奏楽団「PALWINDS」による演奏



そつぎょうてんをみにいこう！

- 実施日：2月28日（土）10：30～
- 会場：京都造形芸術大学 ● 参加人数：17人



10. ピッコリーホームページ (<http://www.piccoli.jp/>)

6月から8月にかけて、アクセス数が多くみられた。こどもの遊び場などを紹介する情報サイトを経由してのアクセスもあり、はじめて来訪される方が多いからか「ピッコリーについて」「連絡先・地図」ページへのアクセスが昨年より増加した。次年度にホームページリニューアルを控え、ピッコリーのホームページにどんなサービスが必要か、情報のまとめ方などをスタッフで検討した。

月別アクセス数

4月	6308	10月	6955
5月	5966	11月	6634
6月	7242	12月	5829
7月	8881	1月	5355
8月	7054	2月	5173
9月	5637	3月	5552

11. 対外活動協力

● 見学

- ・ 京都華頂大学・華頂短期大学
児童サービス論受講学生・教員 5月24日（土）
- ・ 三重大学 教育学部 学生・教員 5月31日（土）
- ・ 鳴門教育大学 大学院 学校教育研究科
幼年発達支援コース 教員 8月31日（日）
- ・ 岡町 YA 読書会 8月18日（月）

● 催事協力

- ・ 「左京子ども会写生会」主催：左京子ども会連合会
5月31日（土） 会場：京都市動物園（学生参加協力）

● 取材

- ・ α-STATION（FM 京都）「SUNNYSIDE BALCONY
（Something Happy コーナーにて）」（2014年6月20日放送）

編集後記



特集ではご紹介できなかった卒業展のエピソードを。ツアーの際、お兄ちゃんの同伴で来ていた1歳の女の子が、ある作品の前から動かなくなってしまいました。それは作者が自分の部屋を再現したもので、会場の一角に柵やコタツや趣味あふれる小物などが並べられていたのですが、そのコタツの中にいたネコのぬいぐるみが、いたく気に入ってしまったのです。残念ながら、先生の評価はそれほど高くないようでしたが、すくなくとも1歳の彼女にとっては、非常に魅力的な作品になったわけですね。子どもたちをみていると、「アート」と「アートでないもの」の区別はあまり重要ではないようにも感じますが、それでも、こんな出会いがあちこちで生じる鑑賞ツアーの面白さをなんとかお伝えしたく、今回の特集となりました。（大橋）

